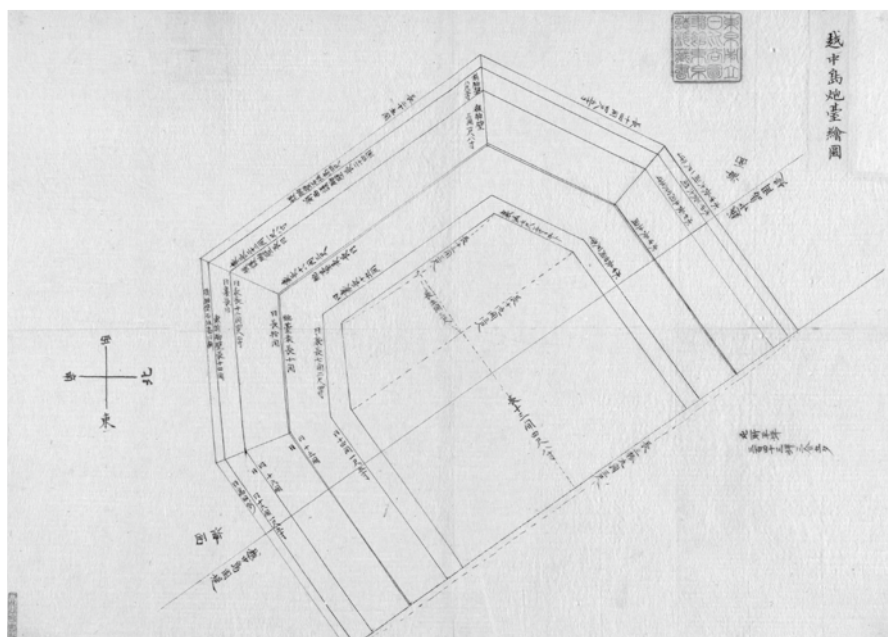


◆令和2年度新指定文化財◆

越中島砲台跡

江東区教育委員会は、文化財保護審議会(会長 佐々木正直：群馬県立館林美術館特別館長)の答申を受け、新たに1件を指定し、1件を登録しました。また、指定1件、登録1件を解除したため、登録文化財の総数は昨年と同じ1061件となります。



越中島砲台絵図(東京都立中央図書館特別文庫室所蔵)

「史跡」という文化財
一般に、文化財といってもその種類は様々です。それらは有形文化財、無形文化財など、対象となる内容によって分けられます。そのなかに、史跡と言われる文化財があります。歴史的に有名な人のお墓などもありますが、主として過去に存在し、現在ほとんど(または何も)残っていない場所を対象としています。そのため、有形文化財の仏像や建造物などのように、歴史を実感することは難しいかもしれません。そのような史跡とし

今回、区の指定史跡となった「越中島砲台跡」は、江戸時代末期に現在の東京海洋大学越中島キャンパスの構内に築造されました。その目的は、江戸湾の防備でした。江戸時代の後期には、捕鯨船なども含め、多くの外国船が日本近海に出没するなか、アメリカ合衆国のペリーが日本を開国したことは広く知られています。その結果、幕府は品川沖に砲台を築造しましたが、同様の目的で越中島にも砲台を築造しました。残念ながら、その砲台は残っていませんが、築造から150年余の時間を経て、昨年度に「跡」として区指定の史跡になりました。
形は残っていないくとも、過去に存在したという事実を伝えること、そこに史跡の文化財的価値があるといえるのではないのでしょうか。
詳細は、次頁をご覧ください。

下町文化



KOTO City in TOKYO
スポーツと人情が熱いまち 江東区

NO.
293
2021.5.14

発行

江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<https://www.city.koto.lg.jp/>

令和2年度新指定文化財

越中島砲台跡

無形文化財公開事業

江東区伝統工芸展～手仕事の魅力～

資料紹介

絵葉書はウソをつく 2

鋳物師の世界を読み解く

鋳物師 釜六・釜七

「占風園四時勝概 画譜」に見る

大名庭園とその周辺②

江戸の町内探訪ミニ

深川と地地

新刊案内

『ゆこうあるこう こうとう文化財まっぶ』

『江東区文化財研究紀要 第21号』

『絵葉書で見る江東百景 大洪水～明治43年8月～』

て、これまで区の指定になったものに、「中川船番所跡」(大島9-1)があります。船番所は、中川と小名木川が合流する北側に、幕府が設けた川の関所で、北関東や葛西方面から小名木川を通って江戸に向かう船の荷物改めを行いました。現在は、すぐ北に位置する中川船番所資料館で、その歴史を展示しています。

指定文化財

【史跡】

越中島砲台跡

越中島2-1-1

国立大学法人東京海洋大学
越中島砲台は、江戸湾防備体制の一環として築造された砲台です。18世紀末から日本近海に海外の船舶が来航するようになり、これに脅威を感じた幕府はさまざまな海防政策を展開しましたが、その一つが江戸湾防備です。

ペリー艦隊の来航に際して、羽田沖まで艦隊の進入を許した幕府は、江戸湾内の防備として品川台場の建設を始めました。その後、薩摩藩士がイギリス人を殺傷した生麦事件の賠償問題をめぐり、文久3年（1863）3月にイギリス軍艦が横浜・品川沖へ来航した事件を契機として、江戸湾防備の強化が図られました。そこで、小野友五郎らによる海防案をもとに、新規砲台11か所の築造等が計画されました。

越中島砲台については、築造のための石材の伐り出しから運搬までを相模国三浦郡公郷村（現・神奈川県横須賀市）名主永嶋庄兵衛らが請け負い、相模国および伊豆国から石材を伐り出すこととしました。元治2年（1865）2月12日付の永嶋の書状から、同日までには砲台の石垣が竣工していたこと

がわかります。新規築造が計画された砲台のうち、竣工したのは5基のみで、越中島砲台は江戸湾防備史上、最後に竣工した砲台群の一つとなりました。

砲台の平面形状は八角形を半分にした台形に近い形となっており、陸地から南西方向の海面に突き出ていました。現存する絵図から類推すると、砲台の最大幅は38間1尺2寸（約18・1m）から39間3尺（約71・8m）程であったと考えられます。

明治維新後、越中島砲台は明治政府に接収されました。越中島は陸軍の練兵場となりましたが、明治24年（1891）に練兵場は廃止され、同32年に陸軍は越中島の用地を引き払い、跡地は商船学校（現・国立大学法人東京海洋大学）などの校地となりました。この頃の工事によって越中島砲台は損壊したと推定されます。

現在、越中島砲台の跡地とみられる範囲は、職員会館の辺りから、その周囲の舗装道路や芝生、ポンドにかかる辺りであると推定されますが、それを明示する遺構は現存していません。しかし、当地は江戸城に近いことから江戸湾防備のうえで重要な拠点の一つとされた施設があった跡地であり、臨海部という江東区域の特性が表れた史跡です。

登録文化財

【無形文化財（工芸技術）】

相撲呼出し裁着袴製作

保持者 山口由紀

大相撲の呼出しがはく袴を製作する和裁の技術です。元来仕事着である裁着袴は、一般の袴とは違い、筒がきわめて細く、裾まわりが一幅で作られています。現在は、膝下を紐で結び、コハゼを用いてふくらはぎにぴったりと密着させます。また、腰板には袴を贈った関取のしこ名が刺繍されています。山口氏は、和裁業を家業とする富永家に生まれ、父の皓氏のもとで修業しました。現在、裁着袴の製作は山口氏が一手に引き受けています。



指定解除

【無形文化財（工芸技術）】

手描友禅

登録解除

保持者 和田宣明

【無形文化財（工芸技術）】

刺繍（化粧廻し）

名称変更

保持者 関谷正一

【史跡】

曲亭馬琴誕生の地

平野1-7・8付近

文化財説明板の設置

令和2年度は、深川公園（富岡1-16）にある「園女歌仙桜碑」①と「園女歌仙桜之碑 昭和6年在銘」②の説明板を新設しました。これらの石碑は、江戸時代の俳人度会園女によって富岡八幡宮境内に植えられた36株の桜のことを、今に伝えるものです。なお、昭和6年の石碑の題字は、最晩年の洪沢栄一が書いたものです。

また、重願寺（猿江1-11-15）境内に設置されている史跡説明板「関根正二墓」については、内容を一部改めました。



無形文化財公開事業 入場無料

江東区伝統工芸展「手仕事の魅力」

日時 5月27日(木)～5月30日(日) 午前10時～午後4時
会場 深川江戸資料館 地階レクホール(江東区白河1-3-28)

今回で40回目となる本展では、伝統工芸品の展示、伝統技術を受け継ぐ区無形文化財保持者による実演を行います(左日程表参照)。ぜひご覧ください。

実演時間(2時間30分)

〈午前の部〉午前10時～12時30分
〈午後の部〉午後1時30分～4時

伝統工芸品即売(会期中)

会場内で、江東区伝統工芸保存会による工芸品の即売が行われます。



昨年の様子(相撲呼出し裁着袴製作)

実演公開日程表		
日程		技術 保持者
5/27 (木)	午前	刀剣研磨 臼木良彦
		べっ甲細工 磯貝 實
		江戸切子 小林淑郎
	午後	建具 友國三郎
		襖・櫺 鈴木延坦
		木彫刻 渡邊美憲
5/28 (金)	午前	帯製作 杉浦正雄
		建具 友國三郎
		無地染 近藤良治
	午後	相撲呼出し裁着袴製作 山口由紀
		染色補正 丸田常廣
		無地染 近藤良治
5/29 (土)	午前	茶の湯指物 山田一彦
		木彫刻 渡邊美憲
		更紗染 佐野利夫
	午後	襖・櫺 鈴木延坦
		すだれ製作 豊田 勇
		更紗染 佐野利夫
5/30 (日)	午前	相撲呼出し裁着袴製作 山口由紀
		帯製作 杉浦正雄
		表具 岩崎 晃
	午後	刀剣研磨 臼木良彦
		茶の湯指物 山田一彦
		表具 岩崎 晃

(順不同・敬称略)

※都合により変更する場合があります。

なお今回は体験を行いません。ご了承ください。



建具



帯製作

深川江戸資料館 一案内図



会場・深川江戸資料館への交通

- 東京メトロ半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「清澄白河」駅下車 A3出口 徒歩3分
- 都営バス門33系統「清澄庭園前」下車 徒歩3分
- 都営バス秋26系統「清澄白河駅」下車 徒歩4分

【文化観光課文化財係】

<https://www.city.koto.lg.jp/>

電話 03(3647)9819

FAX 03(3647)8470

本展は、新型コロナウイルス感染症の影響により中止または変更される場合があります。また、ご来場される際は、マスクの着用、手指消毒、検温等にご協力ください。体調のすぐれない方は来場をお控えください。

詳細については、江東区のホームページをご確認いただくか、文化財係まで直接お問い合わせください。

【江東区ホームページ】

資料紹介

絵葉書はウソをつく2

『絵葉書で見る江東百景 大洪水』番外編①

当文化財係では、平成28年度より『絵葉書で見る江東百景』と題し、当係で収集した、近代の江東区域の写真を用いた戦前発行の絵葉書を紹介してきました。令和2年度（令和3年3月発行）は「大洪水―明治43年8月―」を刊行しました（8頁参照）。今回、この冊子を編集する際に対象外となった明治43年（1910）8月の水害関連の絵葉書のうち、「屋上生活」と題したもののについてご紹介します。

①③はいずれも「屋上生活」と

タイトルに書かれています（発行元不明）。写真には茅葺屋根の建物からひる庇の上に避難した、七輪で炊出しをする禪姿の男性、煙管を吸っている半纏を着た男性、カメラ目線の半纏を着た男性の3名の人物が見えます。周りには、畳や小箆、長火鉢・薬缶・桶・食器類（徳利・碗・皿）などの生活道具が、茅屋根などには濡れたためか衣類を並べている様子が窺えます。屋根から目を転じると、地上部分は浸水しており、箆や木材が浮かんでいる

のが分かります。

各絵葉書のタイトルを見ると①は亀戸付近、②は深川猿江町付近、③は本所押上付近（現墨田区）というように、撮影地点の地名がバラバラであることが分かります。さて、実際の撮影地点はどこなのかという疑問が湧きますが、答えは『グラフィック（東京水害画報）第2巻第8号（有楽社、明治43年9月1日）に掲載されている写真（④）にあります。タイトルには「本所業平町附近」とあることから、同町の隣である押上と書かれた③がほぼ正解で、①・②が間違いであることが分かります。このこと以外に、みなさんすでにお気づきとは思いますが、④と

比べると①③は反転しているため、裏焼きであることも分かります。ちなみにこの写真は「読売新聞」明治43年8月14日付朝刊に掲載されていることから、同月13日までに撮影されたものと考えられます。なお、新聞掲載の写真のタイトルは「屋上生活（洪水所見）」としか書かれておらず、地名の表記はありません。

明治43年8月の水害に関する絵葉書は、今回ご紹介したような同一写真で地名の表記が違うものや、裏焼きのものが他にも多く見受けられます。引き続き次号でも同じような事例をご紹介します予定です。

（文化財専門員 野本賢二）



①絵葉書

「屋上生活（明治四十三年八月帝都大洪水亀戸附近ノ惨状）」



②絵葉書

「明治四十三年八月 深川猿江町附近ノ屋上生活」



③絵葉書

「明治四十三年八月 未曾有大洪水（本所押上附近之屋上生活）」



④「本所業平町附近の屋上生活は雨の日には上下の水攻めで大困り。」（『グラフィック』第2巻第8号）

いもじ 鑄物師の世界を読み解く

鑄物師 釜六・釜七

はじめに

釜屋堀公園（大島1）には、「釜屋跡」と刻まれた石碑が建てられています。

江戸から明治にかけて、同園南隣には、釜屋を屋号とする太田六右衛門家（釜六）と田中七右衛門家（釜七）というふたつの鑄物師の鑄造所がありました。このことから、釜六・釜七、の傍らの川筋は「釜屋堀」と俗称され、後年、同園の名称の由来となりました。今回は、この釜屋について取り上げていきます。

釜六・釜七について

『国史大辞典』によると、鑄物師とは「金属をとかし、諸種の型にいれて、武器や各種の像・鏡・鍋・釜などをつくる工人」です。歴代の釜六・釜七は、日用品である銅釜類を製作し、後に梵鐘・仏像・天水桶などを多く手がけました。

区内で現存するものには、善徳寺（三好二）に、文化四年（1807）の「鉄造天水桶」があります。天水桶の裏側には「太田近江大掾藤原正次」の銘があり、釜六によって製作されたことがわかります。

「大掾」とは、古代から中世にかけて中央から地方へ派遣された国司（行政官）に与えられた官職で、上から3番目の役人のことを示します。初代釜六は、延宝5年（1677）に任官しました。以降、釜六はこの称号を銘として用いています。官職が与えられることは、朝廷より優れた職人として認められたことを意味しました。

釜七の作品には、おさん稲荷（牡丹1）に、明治30年（1897）の「天水桶」、浅間神社（亀戸9）同33年（1900）の「天水桶」があります。

享保2年（1717）、釜六は、將軍（吉宗）の江東方面への出遊の際に、炊き出し用の鍋釜の用意を命ぜられました。この際に、釜七とともに幕府より「御成先御用釜」を任せられ、寛政6年（1794）に小金原（現千葉県松戸市）で行われた鹿狩の際には、狩場で使用する釜の供出が命じられるなど、幕府と深い繋がりをもりました。

両家は、長者番付である『大江戸豪商家持丸長者鏡』に記載されるほど、家業は盛況となりましたが、明治となると、両家の経営は傾き、まもなく釜六は廃業しました。一方、釜七は、明治末年まで存続しましたが、やがて一族の田中浅右衛門友興が継ぎ、屋号が「釜浅」と改められました。店は日本

橋小網町（現中央区日本橋）でしたが、鑄造所は依然として釜屋堀にありました。

辻村の鑄物師

『御府内備考』によると、釜六・釜七は、近江国栗本郡辻村（現滋賀県栗東市）の出身で、寛永17年（1640）に江戸芝海手（現港区田町）に出店した後、深川上大島町（現大島1、4、5）に移転したとあります。

近世の近江国では、経済活動が盛んであり、商人が全国を移動して商売を行いました。辻村の鑄物師は、関東・東海地方を中心に出張（自宅以外の現場に出かけて仕事をする）こと・出店したことが指摘されており、釜六・釜七はその代表と言えます。

現在、滋賀県栗東市に鎮座する井口天神社には、元禄7年（1694）に建立された銅製鳥居があります。同社は、辻村の鎮守社であり、円超寺（現滋賀県栗東市）とともに鑄物師の信仰をあつめました。

鳥居には、「関東出店氏子中」として59名の鑄物師の銘が刻まれており、その末尾には次のようにあります。

御鑄物師并大願主

田中七右衛門尉藤原重次

太田近江大掾藤原正次

于時元禄七甲戌歳八月吉祥日

武州江戸於深河作之

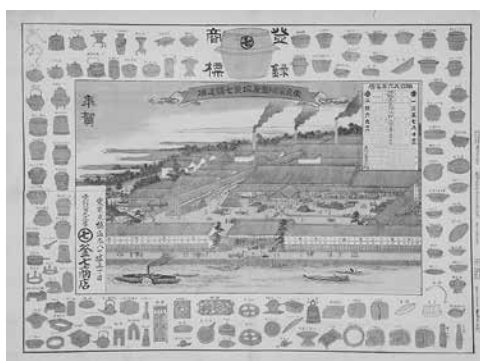
ここからは、鳥居が、同社の氏子である釜六・釜七が大願主となって、「深河」（深川）で鑄造された後、同社に運ばれたことがわかります。

鳥居の奉納は、釜六・釜七をはじめとする辻村出身の鑄物師が、他国へ出店してもなお、辻村や同郷の鑄物師の間で、信仰を通じた強い結びつきがあったことを示しています。

おわりに

今回は、釜六・釜七について述べてきました。鑄物師は、古代以来、特殊技能を持った職人として、長い歴史を有する存在です。

このため、釜七の後を継承した釜浅家には、こうした伝統を背景とした史料も残されています。



「東京深川釜屋堀釜七鑄造所」

「占風園四時勝概 画譜」に見る 大名庭園とその周辺②

近江国（滋賀県）仁正寺藩1万7千石の市橋家が、本所五ツ目（亀戸6付近）に拝領した下屋敷に占風園の雅名をもつ庭園を築造したことは、本誌291号で紹介しました。その庭園を文化9年（1812）に描いたものが、「占風園四時勝概 画譜」（国立国会図書館所蔵）です。

庭園の四季を描いた画譜の夏と穠（秋）の間には、付近と思われる農村風景も描かれています。すでに紹介した通り、田植えや苗・肥運びの様子、あるいは親子、僧侶と思われる人々が登場し、村仕事や村を取り巻く人々の多様な姿を窺うことができます。藩のお抱え絵師か否か、詳細は不明ですが、藤原祐壽なる人物によって描かれたこの画は、亀戸付近の村の様子を知る手がかりともなり、その意味で貴重です。大名庭園の四季を描くことが目的であるにもかかわらず、なぜ村の全景、田植えなどの農作業風景、村の人々などを詳細に描いているのでしょうか。本稿では、291号で取り上げなかった次の二つのこと、すなわち描かれている耕地の多様な「姿」、絵の上

部に描かれている、馬を引いた人物について紹介しつつ、前回紹介した内容も含め、江戸時代の村と、なぜここに描かれているかについて考えてみたいと思います。



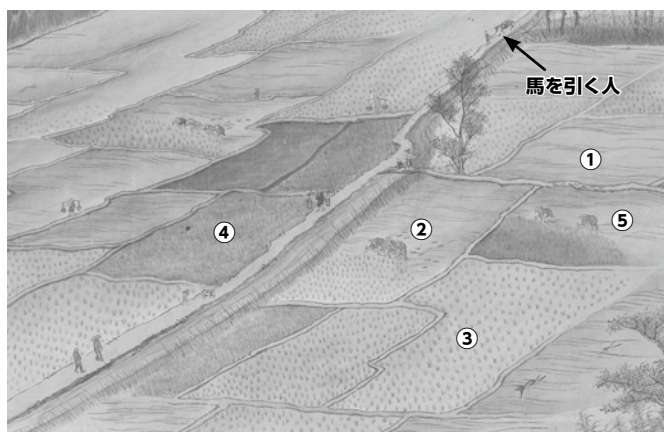
村の風景（「占風園四時勝概 画譜」）国立国会図書館所蔵

耕地の多様な「姿」

江戸時代は、幕府・大名・旗本などの領主が村を支配した社会で、村は領主に年貢を納めました。その年貢を納めるため、村人は農業に関わる様々な仕事に従事しました。米を生産するためには、田の起こし返しにはじまり、育てた苗を運ぶ、その苗をさらに成長させるため肥を運ぶなど、すべて人力で行った当時、それらは容易なことではなかったと推測されます。

この絵には、それらの仕事振りが描かれているだけでなく、田植えに至る迄の田の段階的な様子が確認できます。もちろん、絵から窺えるということとで、その詳細を知ることではできませんが、耕地の様子は、次の三つの過程に分けて描かれているものと思われます。

まず、代掻きが済んだ状態の田んぼ①、複数人で田植えをしている田んぼ②、田植えが終了した田んぼ③がそれです。ただし、青々とし、何かが実っている様子を描いた④については不明です。⑤の二人が苗を植えているように見えることから、これも田植えが済んだ田んぼなのかも知れませんが、この部分には稲以外の植物（麦など）が植えられていたのかも知れません。



村の風景（部分、以下すべて部分）

いずれにしても、1枚の絵に田植えの様子をわかりやすく描いている点を指摘することができます。

また、田植



田植え

えをする人など、描かれている姿を見ると、多くの人が頭に傘（菅傘か）を被っていることがわかります。このような見落としがちなことまで丁寧に描いていることから、村での日常の姿を詳細に描こうという絵師の姿勢が見て取れます。

馬を引く人

続いて、絵の上部を見ると、馬と馬を引く人物が描かれていますが、馬は、前足を曲げて描かれており、歩く様子にも細かい描写が見て取れます。



馬を引く人

村では、牛や馬を農耕等で使役しましたが、描かれた田の様子から、田起しは終わっており、水を張ったのち、かき混ぜる代掻きも済んでいるように思われます。また、馬の胴回りに何か巻かれていますので、この馬は農耕ではなく、何かを運搬するために引かれているのかもしれませんが。昔は、馬を売買する馬喰^{ばくろ}という仕事がありました^{が、その可能性も考えられます。}

村を描くということ

このように見てくると、本来であれば大名の下屋敷に築かれた庭園のみが描かれる対象であるはずが、そこに現在の亀戸辺りの村が描かれているこの絵から、何が読み取れるでしょうか。

見る側としては、当時の江戸近郊農村の様子を知る手がかりとなるため、貴重であることは先に述べた通りで

す。この絵がなければ、現在とはあまりにかけ離れた、200年ほどまえの付近の村の様子など知ることはできません。そのため、この絵は大変有益なものと考えられます。

しかも、農業等に関わる人々の姿が描かれていることで、農作業などの仕事などのように行われたのかを知ることができます。天秤棒で苗や肥を運ぶ人、田植えを行う複数の人、その人々に食事を持ってきたように見える親子。このような一つひとつの場面にも村の日常の「姿」としての小さな「世界」が展開しています。

ちなみに、村の様子が描かれている



村の風景



田植え



橋を渡る親子



苗を運ぶ



肥を運ぶ



東都名所 五百羅漢ざい堂(国立国会図書館所蔵)

といえば、歌川広重の東都名所に「五百羅漢ざい堂」という錦絵があります。現在の江東区大島にあった五百羅漢寺の通称「ざい堂」を描いたものです^{が、そこには農民らしき人々が描かれています。}大島は亀戸にも比較的近い場所^{で、こちらも江戸近郊農村といえますが、江戸名所の「ざい堂」が中心に据えられているため、村を描いたものではないと言え、そこから農業の具体的な様子、あるいは村の生活を知}ることはできません。

このように考えると、なぜ画譜に村の様子が描かれたのか、疑問は深まるばかりです。

「占風園」があつた付近は、現在「占風園跡」(史跡)として江東区の登録文化財になっています。そこにあつた庭園を描いた画譜に、全く異なる「世界」が描かれていることは何を物語るのでしょうか。

領主が愛でる人工的につくられた庭園とともに描かれた、生産・生活の場である村の空間。両者は、まったく対照的な「世界」といえます。

領主の生活とは異なる「世界」が誰の求めで描かれたのかわかりませんが、興味は尽きません。

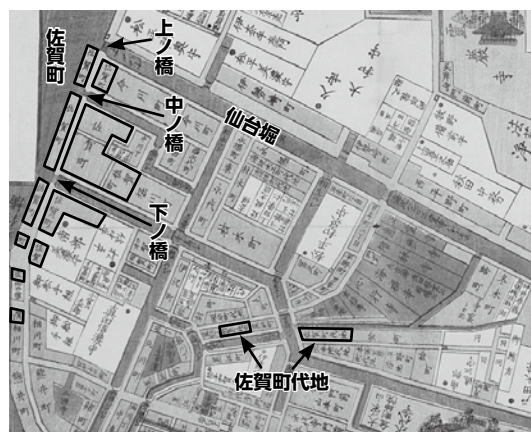
(文化財主任専門員 出口宏幸)

深川と代地だいち

幕末期に描かれた江戸切絵図のうち、「本所深川絵図」には多くの代地が確認できます。代地は、町の一部分が幕府の御用地となり召し上げられると、それに代わる土地として与えられました。深川に、その代地が多く見られるのはなぜでしょうか。

江東区は、江戸北部の一部を除き、そのほとんどが江戸時代に埋め立てられました。そのため、町が成立したのち、幕府は各所を御用地として召し上げ、さまざまな土地利用を行いました。一つの例として佐賀町（現佐賀付近）を取り上げてみましょう。

佐賀町は、深川獺師町八ヶ町のうちに属した町で、寛永6年（1629）に成立したと伝えられます。寛永18年（1641）には町の西側に広大な木置場が成立し（のち元木場）、堀割が整備されました。そこには「上ノ橋」かみのはし「中ノ橋」なかのはし「下ノ橋」したの橋が架けられますが、60年後の元禄14年（1701）に木置場はさらに東へ移転（木場4・5付近）したため、上ノ橋は現在の清澄と佐賀の間に場所を変え、地面を掘削したのち、新たに架橋されました。この掘削した土地とその南にあった中ノ橋、下



本所深川絵図（部分）

ノ橋の水路拡張に伴い消滅した土地に対し、2ヶ所の代地が町に与えられました。

この上ノ橋は、現在の仙台堀川が隅田川と合流する地点に架けられた橋で、隅田川手前まで堀割が存在し、合流部分のみ土地が残されていたため、隅田川と結びつけたことで、物資の運搬が可能になりました。そして幕府は、佐賀町東側の広大な元木場を町場として開発し、その東に新たな木置場を設けたのです。

深川には、このほかにも清住町代地（2ヶ所）、大島町代地、黒江町代地などが確認できます。

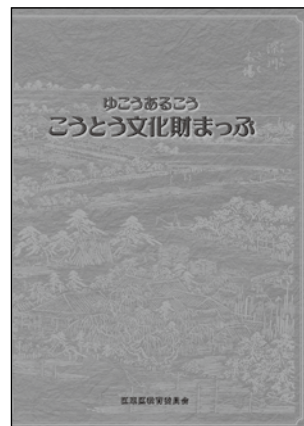
これも、開発地深川の特質のひとつと言えるのかもしれませんが。

（文化財主任専門員 出口宏幸）

—— 新刊案内 ——

『ゆいてあるこゝろと文化財まっぷ』

区内の文化財や史跡を紹介するガイドマップを改訂しました（第4版）。区内の名所を描いた錦絵や写真、絵図などを豊富に掲載しています。江東区の文化財めぐりにかかせない1冊です。



A4判 32頁 価格 500円

『江東区文化財研究紀要 第21号』

江東区の歴史・文化財の研究や報告を内容とする雑誌で、論考（「江戸前」に関する一考察）、研究ノート（近世・近代における砂村（町）の民間信仰）、史料紹介（明治四十三年八月水害に関する一史料）の3本を掲載しています。



B5判 69頁 価格 700円

『絵葉書で見る江東百景』

大洪水 明治43年8月

本書は、教育委員会が収集した戦前の絵葉書を通して、本区の近代の景観を知っていたくシリーズの第5集です。今回は明治43年8月に起きた水害に関する絵葉書（江戸駅、天神橋通り、天神橋、江戸神社、小名木川、木場）を取り上げます。以上のほか、「明治43年8月の水害」（4～7ページ）では、水害の発生から東京市域の被害状況、救護活動など参考図版を交えながらご紹介しています。



A4判 14頁 価格 500円

「頒布場所」文化観光課文化財係（区役所4階）、こうとう情報ステーション（同2階）、芭蕉記念館（常盤1）、深川江戸資料館（白河1）、中川船番所資料館（大島9）、深川東京モダン館（門前仲町1）※紀要は除く

「問合せ」文化観光課文化財係

TEL (3647) 9819